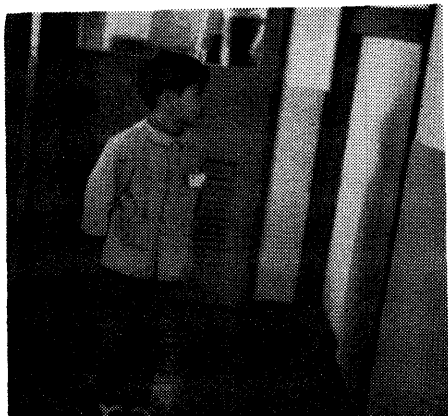


手先の動きと子どもの感情 ⑪



清水エミ子

写真 ①

たったひとりになったときの指先の表情

廊下、保育室、ホール、ベランダなど、どんな場所でも、ひとりぼっちになったとき、子どもたちの指先、手の表情は、いろいろに訴えています。

◎ 誰もいない廊下に出て来て、ポツンと、何をするということなしにひとりであるときの、いろいろな表情

A・手に何も持たずに保育室からひとりで出て来てポツンとしていたたつおは、手をダラリとさげて、たよりなさそうにしているのです。(写真 ①)

「なかまに入れなかったの？」と声をかけてみた。

「うん、けんちゃんがだめっていったの」といって、そのときはじめて、ダラリとしていた手で上衣の裾をつかみ、私に訴えてきた。

廊下に出てきたときの顔や、からだ全体だけでは誰かを捜しているようにも見えるのだが、手のひらと指がダラリと淋しさを表わしているのです。その淋しさも、不本意に味わってしまったのだということが、顔と手先と、総合した表情にはっきりと表われていたのです。

B・同じようにへやから廊下に出てポツンとしているのでも、

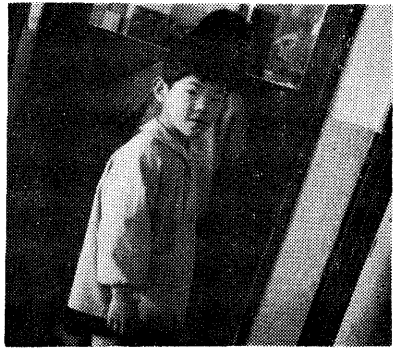


写真 ②

写真 ③



ます。

C・たったひとりで廊下にいるけれども、廊下の壁に、べったり寄りかかって、何するとはなしにボツンとしている、ゆり子

(写真 ③)

手の指は、力が入っていないが、指の関節ごとに、内側に曲げられています。

この手の表情は、廊下にひとりでボツンといるときだけでなく、保育室、園庭と、場は違っていても、物に寄りかかっているという状態のときの指は、大体関節ごとに曲げられている(かく内側に)ということが多いことに気づいたのです。

顔やからだでの表われでは、今にやって来る友だちを待っているように見えるのですが、指さきからは、自分がどう活動しているか分からない、たよりなさが表われているのです。

物に寄りかかっているときの、手先の指の表われが、このたよりなさを、はっきり知らせてくれるのです。それを読み取ったので、「何しているの?」と声をかけてみました。「なんにもしてないの、どうしようかな」という答が返ってきたので、やはりたよりなさの表われだったのだと、はっきり解釈することができたのです。

D・廊下の一カ所に、じっとしてボツンとしているのではなく、廊下をブラブラ歩きながらボツンとしている、ゆみ子 ゆき子。

動きまわってポツンしているときの指は、何かをかるくつかんでいます。衣服の部分をつかんでいたります。

自分で、どう動こうかとエンジンがかかりかけているときなので、物をつかんだり、服の横腹のへんをなぞってみたりしているのではないのでしょうか。からだの動きと共に、手先、指も動いているようです。

この事例は、数が少なかったので、もう少し、廊下でポツンとしているが、動いている、という子の手先を、たくさん見たいと思っているのですが。

E・便所から出て来て、ひとりポツンとしてしまう。

私の園の便所は、保育室から、廊下をはさんだ向こう側にあります。便所から出て来たときのひとりぼっちは、一瞬緊張するようです。しろうも、便所の中で手をふいてしまつて、手には何も持たずに廊下に出たのですが、手先はやや緊張しているのです。

次の行動を期待しての緊張の指先になっているのでしょうか。しかししろうは、何かを想像していたかもしれません。

廊下からホールへ、廊下から保育室へ、という、自分が行こうとすることへのエンジン始動、緊張の状態です。そのことがわかるのは、自分のからだの前方に手があることです。手の指先も前の方を向いているのです。そんなことから、よみとれると思うのです。



写真 ④

◎ くつばこの所でひとりであるときの表情

朝登園して来たとき、ひとりぼっちだったときの指先は、いろいろに反応しています。

F・くつばこに片手をそえている指先

(写真 ④)のように、顔やからだは友だちを捜して追いかけており、外見は普通の状態としか受けとれないのですが、指先は、力なく、淋しき、たよりなきを表わしているようです。

しかし私は、この手先の反応をみたとき、次のような感じとり方もしてみようとしたのです。



写真 ⑤

元気に登園してみたら、目ざす友だちがだれもくつばこのところになかったため、友だちを捜し、追い求めることにいっしょうけんめいになり、指先にまで神経がいきとどかないので、ダラリと、がっかりしたような表われになっているのではないだろうか？ 子どもには今は目を働かせているときで、このような表われになっていると考えられるのではないかと、繰り返し、両方の考えで、もう一度、指先をみなおしてみたのです。

しばらく指先をみつめていると、

「誰もいないね、ぼくひとり、げっそりだなあ——こうちゃん来てるかな、ママねぼうをするんだもん」とひとりでつぶやいたの

です。

これは、「げっそり」とことばで表わしてくれたので、指先の表われが違っていないということが、わかったのですが、このとき、私は、指先の表われだけを過信し過ぎてはいけなく強く感じ反省したのです。

指先の反応を読み、それをからだや顔、まわりの状態と、総合して感じ取らなくてはいけないのだと気づいたのです。

こんな時、次に、

G・保育室から出るのが遅くなってくつばこにひとりぼっちになった、かつじ(写真⑤)の状態をみると、くつばこにかけた指先がFの事例の指先とよく似た表われをしていたのです。

そしてこの子の口からも「ビリビリ、誰もいないや」と、つぶやきがもれていたのです。

この子が門の方に駆けていった後にもうひとり、くつばこに来て来たのですが、この子も、ベランダをきよろきよろ見まわして、かつじと同じような指先の表われをさせて、くつばこのへりへそえていたのです。

この三人の子どもの指先の表われをみて、私は、ひとつのケースでの共通な表われではないかなと気づいたのです。

くつばこのところでのひとりぼっち、という共通のケースで「げっそり、やれやれ、さみしい」という共通の内容の表われで

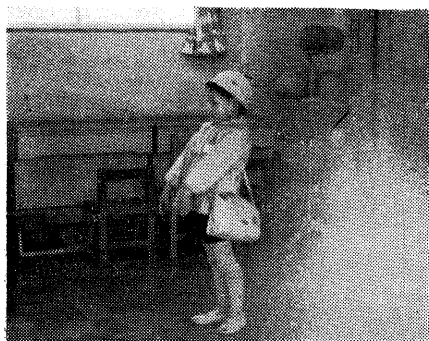


写真 ⑦

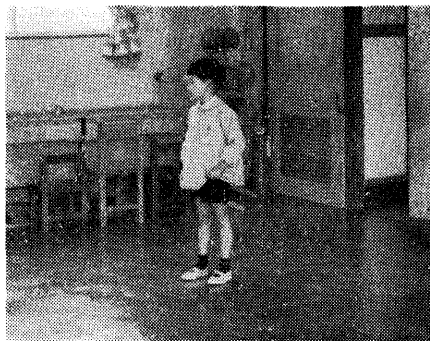


写真 ⑥

あると解釈してもよいのではないかと考えたのです。

まだまだ事例を重ねて観察しなくてはなりませんが、同じケースの中の共通性を探ってみなければいけないと、このことから気づいたのです。

◎ 保育室や園庭からホールへ入って来たとき、室がからっぽでひとりぼっちだったときの表情

H・廊下から歌をうたいながら、ホールに入ってきたとき

(写真 ⑥)
入口から、5歳ぐ

らい中へ入ったところで急に立ち止まって室を見まわしたときの指先、瞬間誰もいないことに気づいて、ビックリしたらしく、うわっぱりの裾をぎゅっと握りしめてから、体の力をぬいて「わー誰もいないのかー」と大声でつぶやき、ホールをひとまわり駆けまわってまた廊下に出ていった。

このとき、私がホールの中にいたのではひとりぼっちのときの表われが出ないので、ベランダの方からようすをみていたのです。

I・廊下から、スキップをしながら、両手は、ポケットにつこんだままホールに入ってきた。(写真 ⑦)

ホールに入り込んだとたん、スキップはやめ、ポケットにつこんだ手は出され、ポケットの少し下の方を、ぎゅっと握りしめていた。(両手が同時になされていた) そして「アレー、空っぽ、みんないないや」と声が出たのです。

これも、瞬間びっくりした表われ、ひとりぼっちだったことがわかったときの指先の表われのようです。

J・廊下のほうから、ひとりぼっちを味わいながら、のっそりのっそりやって来て、ホールをそっとのぞいて誰もいないことを確かめて、中に入り込んでみている、いく子。

ホールの中に入り込んで「へへ、私ひとりだよ」といいながら、手をからだの両脇にダラリとさげ、やや左右に広げ、宙に浮

かしていた。

このいく子のようにでもわかるように、ことばや顔は普段とかわりないが、手はからだの両脇にぶらりとさげられ、宙に浮いている状態は不安を表わしていることがわかったのです。

いく子が出て行って少したった後に、かつじが入って来た。このかつじは、無口で消極的な子なのだが、ホールに入ってたつひとりでたつことがわかると、ちょっと下をむいて、両手をタラリとからだの横にさげ、宙に浮かしていたのです。

いく子と、かつじのふたりのようす、手の表われを見ていて、気づいたことは、ひとりぼっちが、瞬間いやだと心を感じると同時に、手が宙に浮いてしまう。空間にさまよい、不安を表わしているのだなあと思われたのです。

いく子などは、赤ん坊が、不安のとき、両手で空をかくのとよく似ているなということを思わされたのです。

また、もうひとつの表われ方は、身近のものに不安を託し、しがみついていく、握りしめるという表われで、安定を保っているのではないかと思われるのです。

いく子、かつじのように、ブラリと空にある手先からは、自分から解決しようという意欲は読み取れないのです。

上衣の裾でも、ポケットの下でも、何かにすがってその時の心の不安を解決していく方が、物事に対して積極的な表われとみえよいのではないかと気づきはじめてのです。

◎ 玄関にひとりぼっちでいて、壁に寄りかかり、しゃがみこんでいるときの表情 ゆたか(写真 ⑧⑨)

口の中でぶつぶつ何かいいながら、廊下ぞいの玄関の壁に、寄りかかってしゃがみこんでいるのです。



写真 ⑧

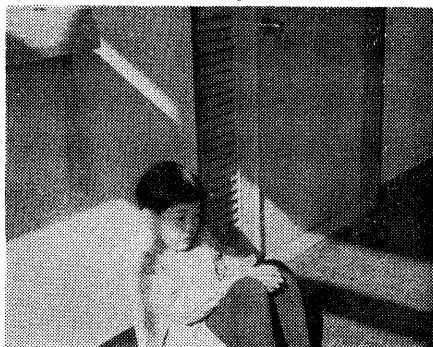


写真 ⑨

手のひらを合わせ、ひざの間にはさみ込み、出したりはさんだりを、繰り返していました。

もう少し詳しく手先をみようと思つたが、近づいてみると、ひざにはさまれた手の指は、こきぎみに、こちょこちょ、動いていたのです。

口での話や顔の表情は、のんびりひとりを楽しんでいるようにみえたのですが、やはり、心の中は不安で、どうしようかと、手先が神経質に動いていたようです。

写真 ⑩

少しして合わせられた手の平が分かれ、ひざの上へのせられたときは、手の指は緊張してひざの上に水平になり指の先端がビクビクと動いているのです。

安定の状態な

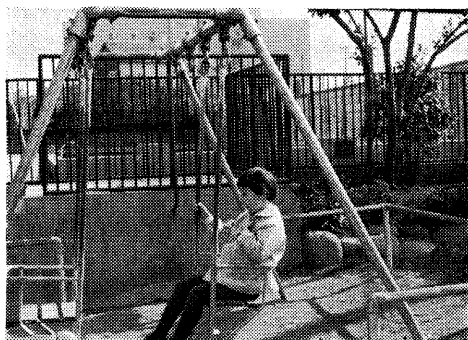


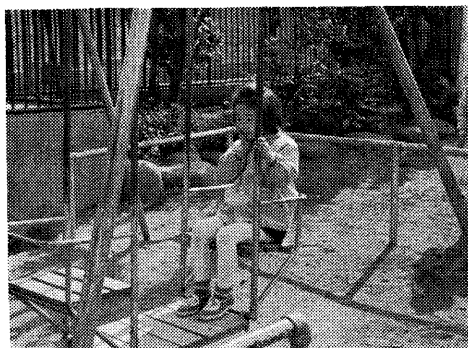
写真 ⑪

ら、ひざを手のひらで包み込んでもよいなどみていて感じたのです。

◎ 物に乗ったり、物を持ったたりしながら、ひとりぼっちだったときの指先の表情

K・ブランコに、ひとりぼっちで乗っていた。片手はブランコの鉄の棒を握り、片手の人差し指は、くちびるにあてられている、まり子(写真 ⑩)

写真 ⑫



足はブランコをゆするでもなく、ゆすらないでもないという中途半端な状態なのです。

L・ブランコに立ち乗りしているのですが、片手はブランコの鉄棒に腕をからませ、ひじのところであつかまっていて、片手は、鼻のあたりにのせている、のぼる(写真⑪)

ブランコはもうすぐ止まってしまいそうなくらいしかゆれていません。顔やからだはボンヤリしています。口も半ばあいているのです。

鉄棒にしがみついているひじも、力が入っていないのです。

M・ブランコに腰かけ、片手は鉄棒を、第二関節でそっとさわっていて、もう一方の手は、ほんとにも、耳たぶとも分らないところに、軽く添えられている、みえ子(写真⑫)

このように、物に乗ったりしているときのひとりぼっちの指先は、右、左、別々の動作をしながら、その左右の組み合わせで心を表わしていることがわかったのです。

からだの部分に、指先、手のひらをあてることによって安定を保っていることの表われであることがわかったのです。

自分の力で動かせるものに乗っているとき(ブランコのようなもの)と、他人に動かしてもらって余力があるときに、ひとりぼっちになったときの指先の表われは、また違っていると思うのです。(箱車で押してもらっていて)こんな状態は今回記録するこ

とができなかったのですが、ブランコは、自分で選んでひとりぼっちになるときが多く、箱車のようなものは、他人からひとりぼっちにさせられたり、偶然ひとりぼっちになったときなのです。このように両方の状態を、よく見くらべ指先の表われを分析しなくてはと強く感じたのです。

今回は、ひとりぼっちであるときの指先の表われをみつめてみたのですが、ひとりぼっちになる前の状態、なったときの内容によって、いろいろと、表われ方は違ってきていることがわかりますが、ただ全くぼんやり、目的がないボンヤリの指先は、たよりなく宙にさまよっているし、ひとりぼっちだけけど、これから何かをしたい、とか期待しているときのひとりぼっちは、自分でのさめしきや不安を消そうと努力したり、次の動作に早く移ろうとする指先の積極さがみられたように思うのです。

今回の観察を通して、指先の表われの違いの中での類似を捜せるのだろうか。

ケースの中で共通性をつかまえる、ということのむずかしさと必要を、特に強く感じたのです。

(大田区立蒲田幼稚園)